2024 「ことばの森教室」第2回優秀作品紹介

<小学校5年生> 作文課題「○○の手」

5-① 「ありがとうの手」

私のおばあちゃんは82才。その手は色白で、つるつるしていて、まんまるく、しわしわで、やけどのあとや、切りきずやしみがあって、私には何でも知っているように見える手だ。

その手は、私に色々な顔を見せてくれます。学校から帰ってくる私を、おやつをいっぱい作ってしてくれる愛情の手。習い事のある日は、お腹が空かないようにと、ふっくらおいしいおにぎりをにぎってしてくれる、職人の手。遊びから帰ってきて、汗びっしょりでいると、さっと冷たいジュースやお茶を出してくれる、思いやりの手。つかれて寝てしまった時は、そっとタオルケットをかけてくれる、やさしい手。お手玉やあやとりなど、昔の遊びをしてくれる、教えの手。お散歩の時、道で会った時は手をふってくれる、笑顔の手。転んでけがをした時は、お薬とカットバンでケアしてくれる、かんごふさんの手。それで大泣きしている私のなみだを、泣かないよと言いながらタオルでふいてくれる、はげましの手。雨でびっしょりになって帰ってきた私を、タオルでふいてくれる、太陽の手。

そんなおばあちゃんが私は大好きです。私が成人するまで、いやもっとずっと先まで長生きして欲しいです。

私の手はぷにぷににしている、しみしわがなく、まだ小さい手だけど、私も大好きなおばあちゃんのように、温かい手を持つ人になりたいです。

5-② 「言葉の代わりに」

ぼくには、8才年がはなれた弟がいます。まだ2才半なので、小さくてかわいいです。弟のかわいいところは、たくさんあるけれど、ぼくは弟のやわらかくてカイロみたいに温かい手が好きです。

だけど、弟は機げんが悪くなると、ぼくをたたいたりひっぱったりしてくるので、好きだった手がイヤになることがあります。なんで言葉じゃなく、手でたたいてきたりするんだろうと思っていたら、弟がおこったり泣いたりしている時に、たたいてくるのがちがうなと感じました。ぼくは、弟がおさなくて言葉で気持ちを伝えられないから、手を使って気持ちを伝えているのだと思いました。それに気づいてから、ぼくは弟にたたかれても、そんなにおこらないようになりました。だけど、手の力だけで弟の気持ちを理解するのは、むずかしいものでした。だから手だけでなく、表情や声の大きさなどにも注意することにしました。すると、少しずつ弟の気持ちが分かるようになりました。そして、手で気持ちを伝えてくるすがたを見るたびに、弟をかわいいと思うようになりました。

また今日も、弟はたたいたりして手で気持ちを伝えています。けれど、成長することで手を使わなくなるでしょう。その時は、色んなところで弟と、手をつなげるくらい仲良しでいたいです。

5 - ③

「まほうの手」

わたしは、この人の手はまほうの手みたいだなと思う人がいます。

それは、わたしが通っている書道教室の〇〇先生です。先生はようち園の小さい子から大人の人まで、色々な字体書くのです。先生がお手本を書いてくれる時、いっしょに手を持って書いてくれる時、なぜか紙の中に吸い込まれそうになります。わたしにも手はあります。先生と同じようにまねをしても、先生のような字は書けません。先生は、どんなまほうを使っているのだろうかと考えてみました。しかし、わたしには、先生がどのようなまほうを使っているのかまだわかりません。でも、先生になる前、なってからも毎日たくさんの努力をしてるんだなというのは、わたしにも、みんなにも、伝わっているんだということがわかります。先生は、字がダメだった時、手を持っていっしょに書いてくれます。その時わたしは、きんちょうという気持ちより、わくわくといった気持ちになります。なぜ

かという、その時だけでもまほうのような力を持っている手になれるからです。

わたしは、まほうの手を持っている〇〇先生にあこがれます。毎日少しずつ、まほうの手に近づけるように努力して、しょうらいまほうの手を使って、色々なことに挑戦してみたいです。

5 - ④

「お母さんの手」

お母さんの手と僕の手を比べてみると、僕よりもすごく大きい。そして、手が温かくて、たまに手汗がすごく出ている。緊張すると手汗が出ているのは、僕と同じだ。

ある日、お母さんの夕飯の仕度を手伝った。僕はカレーの具材の皮むき、家族の箸やコップを出した。皮をむいた具材をお母さんに渡して、お母さんが具材を切った。お母さんの手には、ネイルがついてきれいだった。その具材を切るスピードが速くて驚いた。なぜ手が大きいのに、繊細な動きができるのか不思議に思った。その日の夜ご飯に時に、「なんでそんなに手が大きいの。」とお母さんに聞いてみた。すると、お母さんは「全然そんなことはないよ。友達にはもっと手が大きい人がいるよ。」と言った。続けて、お母さんが「手の大きさを比べてみてよ。」と言った。僕は、「いいね、やろう、やろう。」と賛成した。その後、家族で手の大きさを比べた。姉と僕の手を比べたら、僕の方が手が大きかった。5歳も年が離れていたのに、びっくりした。最後に、お母さんと僕の手の大きさを比べてみた。そしたら、お母さんの方がすごく大きかった。そしたら、「まだまだ手が小さいね、もっと大きくなないと。」とお母さんが言った。家族みんなが笑った。家族全員が笑っていたので、僕も思わず笑ってしまった。

僕にとって、お母さんの手はまるで優しさが現れている様な手だ。そんな温かい、お母さんの様な手になりたい。

5 - ⑤

「大きな心の小さな手」

ぼくは、お母さんの手を見て、小さいなと感じました。なぜかという、ぼくの手と比べた時に、ほぼ同じくらいだったからです。でもぼくは、時々お母さんの手が大きいと感じる時があります。その理由を伝えたいと思います。

ぼくは、お母さんの手が大きいなと感じた時がありました。その出来事は、ぼくはアトピーというものが体にあり、体が傷だらけです。お母さんは、それを治すために、薬やクリームをぬってくれています。その時に、ぼくはお母さんの手は大きくて温かい手だなあと感じました。他にもお母さんは、ぼくのためにがんばってくれていることがあります。それは、仕事や家事です。お母さんは、家事や仕事を一生けん命がんばってくれています。そして、ぼくのためにやってくれているんだなあと感じることで、さらにお母さんの手は、大きく温かいなあと感じることができました。

ぼくは、お母さんの手は、見た目で判断してはいけないんだなあと思いました。助けてもらったり、自分のためにがんばっているんだなあと感じることができました。ぼくも、見た目は小さいけれど、大きいなあと感じてもらえるようになりたいし、がんばりたいです。

5 - ⑥

「私もあきらめない」

私の通っている小学校に有名人が来た！！来たのは「7本指のピアニスト」として有名な西川悟平さんだ。学校の体育館がピアノコンサートの会場となり、悟平さんが現れた。

「ごーちゃんって呼んでね」と言いながら入ってきた。悟平さんを見て私はおどろいた。指が10本しっかりあったからだ。悟平さんの話によると、3本の指は動かなくなってしまったそうだ。悟平さんの話はとても面白くためになる話だった。夢を叶える魔法のかけ方を教えてもらった。でも、マイクを持った時もピアノを弾く時も、動かない指をかばうようにしている姿を見ると、指が動かなく

なった時は、すごくショックを受けただろうと思った。そんな過酷な状況でも、ピアノをやめることをしなかった悟平さん。悟平さんにとって、ピアノはどういう存在だったのか。ピアノコンサートの最後に、悟平さんは「学校を訪問したくてがんばってきた。」と言った。私は、なんだかすごいなと思った。

ピアニストにとって、命とも言える指。3本の指が動かなくなった苦しみは、悟平さんにしか分からない。指が10本あっても7本しかなくても、悟平さんにしか出せない音がある。「あきらめたらアカン」悟平さんの手と、奏でる音楽は、会場の全員にそのメッセージを強く届けてくれた。「あきらめたらアカン」私もあきらめない。

5 - ⑦

「次の発表会に向けて・・・」

私は、小学3年生からピアノを始めている。自信のある曲をひく私の手は、強弱をつけたりテンポを変えたり思う通りになる。まるで海で魚が泳いでいるみたいだ。

初めての発表会。私は先生と「夢をかなえてドラエモン」を連弾して「となりのトトロ」を一人で弾いた。先生との連弾は、少し落ち着いていた。先生がいると、一人でやっているんじゃないと分かっているみたいに、手も普通に動いていた。しかし、一人で弾いたとなりのトトロは、バックミュージックに合わせて弾いた。おくれたいけないと思うと、私の手からきんちょうがあふれてしまった。手に落ち着きがなくなった。最後の、テンポが速くなるころは、手が思うように動かなくなり、まちがえたまま終わってしまった。私の手が私のものじゃなくなってしまったみたいだった。「私の手どうしちゃったの?」と思った。

そして今、次の発表会に向けて「海に見える街」と「夜にかける」を練習している。海に見える街は、もう完成した。だけど、手が追いつけていないところがある。速く弾きながらペダルを弾く所だ。

私の手と足が息をそろえないといけない。そこがむずかしい。夜にかけるは、一ヶ月前くらいに始めた。この曲もテンポが速く、手は上手く動かない。発表会まで、まだ時間があるので、苦手な場所を克服して、私の手が落ち着いて思い通りに弾けるようにしたい。

<小学校6年生> 作文課題「毎日の生活の中で心が動いたことを書こう」

6-①

「MVPで気づいた感謝」

「ヨッシャー」バットにボールが当たった瞬間、ぼくは心の中でさげんだ。外野が遠くまで打球を追っているのを見て、ホームランだと分かった。そこから必死で走った。チームで勝つことができるかもとホームを目指した。そしてぼくは、この大会でMVPを取った。

ぼくは、2年前からスポ少で野球をしている。今の仲間プレーができるのもあと少しだ。だから、チームのために何か一つでも役に立ちたい。そう思うようになってから、自主練習をするようになった。試合があった日は、打つことのできなかつたコースをたくさん練習した。週末のチーム練習では、みんなに声かけをして盛り上げている。ぼくから声をかけることもあるが、チームメイトからも声をかけてもらっている。お互いに自分では気づけない、直した方がよいところを教え合って意識づけている。

ぼくがMVPを取れたのは、周りの支えがあったからだ。毎回送り迎えをしてくれたり、自主練習に付き合ってくれる家族、声をかけてくれる仲間たちが居てくれるからだ。みんながぼくのために、ぼくがみんなのために行動していたことが報われた気持ちになった。

このMVPで指導者や家族に感謝を伝えられたと思う。そして、このチームでプレイできる残された時間の中で一つひとつの行動を大切にしたり、仲間との生活を楽もうと改めて思った。次の試合でもまたMVPを取りたい。

6 - ②

「みんなの一言」

七夕の日、ついにぼくは山日杯の地区予選決勝戦をむかえた。この大会は、少年野球の大会の中で、最後の大きな大会だ。絶対に勝って、県大会への道をつかみたいと思っていた。

その日はとても暑く、立っているだけでも汗がたらたら流れるほどだったが、みんな気合いが入っているのか、声もすごく出ていて、暑さに負けずに戦うぞ！という気持ちをすごく感じた。ついに試合が始まった。ぼくは4番ピッチャーで出た。後攻、初回守り。さっそくノーアウト、1・2塁のピンチだ。気合いを入れて投げるも、次のバッターにレフトオーバーを打たれ、2点を先制されてしまった。ぼくの心は、打たれたことと点が入ってしまったことで、プレッシャーに押しつぶされそうだった。そんな時、監督がタイムを取り、ぼくの所に選手みんなが集まってきた。「大丈夫。落ち着いて。」と、仲間達が声をかけてくれた。その言葉に、ぼくの心が動いた。一人じゃない。みんなで勝つんだと強く思った。その後は、3回表で逆転し、最後1アウトを取れば勝利というところまで来た。最後のバッターのフライがぼくの所にきた。ぼくはドキドキしたが、見事にキャッチして優勝を手にした。バンザイをしてみんなで喜んだ。

次は、あこがれの山日YBS球場で試合が出来る県大会だ。みんなで力を合わせて優勝して、また笑顔でみんなで喜びたい。

6 - ③

「最初の一言」

「キャンウィーテイクアピクチャートゥギャザー？」この言葉が、のどの辺りにつまって、なかなか口から出てこなかった。

私は幼い頃から人見知りで、特に外国人に対しては、見ただけでも緊張してしまうような性格だ。しかし、今回修学旅行先で出会った外国人観光客に話しかけて、一緒に写真を撮ってもらうという課

題があった。2日目に訪れた浅草は、外国人観光客がとても多く、このチャンスを逃すまいと、勇気を出して一人の外国人に話しかけてみた。場所は雷門の前。ジェスチャーを交えて「私たちと一緒に写真を撮ってもらえませんか？」とお願いすると、「オーケー」と、笑顔でポーズをしてくれた。さらに、「せっかくだから、こっちの角度からでも撮ろう。」と提案してくれた。短時間の交流だったが、ブラジルからの観光客で、日本が好きで数回来ていることなど、分かりやすい英語で話してくれた。私たちが「サンキュ」とお礼をすると、彼は日本語で「ドウイタシマシテ」と返してくれた。

最初は緊張したが、思い切って話しかけて本当に良かった。一人では出せなかった勇気も、クラスメイトがいてくれたおかげで出すことができた。誰かがいてくれることは、一步を踏み出す力になると感じた。この経験を通して、人見知りが少し克服でき、外国人とのコミュニケーションを楽しむという、新しい世界が広がった。

6 - ④

「自業自得」

前までは大丈夫だったけれど、こんなにも人はすぐが変わってしまうのだなと、そう思いました。ピアノの練習、毎週木曜日にある習い事です。ある日先生が、発表会をするという話をしてくれました。それは、習い始めてからずっとしていました。毎年毎年ずっと、その度弾きたい曲を選んで、楽しく練習していました。ですが、今年は少しハードで難しい曲を選ぶことになりました。ショパンの曲とディズニーの曲。難しいけれど、今まで何とかこなってきたので、今年も何とかかなると思っていました。練習していて、「あれ、難しい、これは頑張らないと」と、そう思う時もありました。ですが、練習をしない日が次第に多くなり、発表会まで残り2ヶ月ほどになりました。全く進んでいないが、まあ今まで大丈夫だったから、今回も大丈夫だろうと、そう甘く考えていました。ですが、予想とは裏腹に、先生に「もっと頑張らないと、発表会で大変なことになる」と言われました。確かに、

今までさぼっていたけれど、毎年何とかなっていたから大丈夫、そう言い聞かせました。しかし、親にも先生にもあれこれ言われ、帰る時気づけば涙が出ていました。自分が情けなく思えてなりませんでした。去年や一昨年は、こんなことはなかったのに、こんなにも変わってしまうと思いました。

今も発表会に向けて練習しています。一日二、三十分、自分のために、そして親のために頑張っています。

6 - ⑤ 「私の居場所な大切なもの」

本一冊で、こんな気持ちになるなんて思いもしなかった。

私は5年生までは、本を読むのが好きだった。自分だけの時間ができ、本の世界に入り込むことが出来るからだ。そして想像する。主人公はどんな気持ちだったのか、どんな空気だったのかなど想像すると、とても楽しい。でも6年生になってからは、本をあまり読まなくなった。ずっと読みたいと思っていたが、やらなければいけないことが山ほどあって、読めなかったのだ。しかし、最近は時間ができて、図書室に行けるようになった。そこで、図書先生に聞いてみた。「おすすめの本はありますか。」先生は本棚に行って、本を取ってきてくれた。「この本読んでみたら、思わず涙がこぼれたの。長いけど、ぜひ読んでみて。」家に帰って、ページをめくる。びっしりと書かれた物語は、戦時中のものだろう。育ててくれたおばあちゃんを失った三兄弟は、戦時中どんな気持ちだったのだろう。自分だったら・・・と考えると、胸がキュッとする。喉の奥が詰まるような間隔もある。読み進めていく内に頬に冷たい何かが流れた。涙だ。本一冊でこんな気持ちになるなんて、思いもしなかった。

その日を境に、定期的に本を読むことにした。自分の世界に入り込める私の居場所の本は、私にとってとても大切なものだとわかった。本は奥深く、面白い。今私は、物語の1ページを開いている。

6 - ⑥

「来年まで待つから」

「チュ、チュ」今年も聞こえてくる鳥の声。思わず笑みがこぼれる。

「ただいま。」そう言って家に入った。いつものようにランドセルを置き、宿題を広げているところで、じいじが顔を出し、「おかえり。鳥が巣を作り始めたよ。」と言った。じいじのその一言を聞いて、私は窓の外に目を向けた。「あ。」外を見たと同時に、親鳥が巣から飛び出した。ひなにあげる食べ物を取りに行ったのだろう。巣の中からはひなが顔を出している。じいじの家には、庭木や植物が植えてあり、ひなが食べる昆虫もたくさんいる。そして、手水鉢もあり、喉が渴いた時には、そこで水が飲める。しかし、仲間がいないと心細いのか、あまり手水鉢で飲む姿は見かけない。飲むこともあるが、すぐに飛んで行ってしまうので、ゆっくり観察したことはなかった。それでじいじは、本物そっくりの置物を買ってきて、手水鉢にそれを置いた。来てくれるかな、と期待で胸が高まった。次の日、鳥が手水鉢にとまっていた。前よりもゆっくりと鳥の姿を観察することができるようになった。次の日も、また次の日も、帰ってくる私を出迎えてくれるように、鳥は手水鉢にとまっていた。

鳥たちは育ち、5月頃に飛び立っていった。だけど、手水鉢を見るたびに、あの鳥たちを思い出す。来年もまた来てね。待っているから。

6 - ⑦

「毎日の生活の中で心が動いたことを書こう」

「がんばったね」母のその一言が、僕の心を動かす。バスケットの送迎に美味しいご飯。母は偉大だ。それがあから、今の僕があると言っても過言ではない。

僕の心が動いたことは、毎日お母さんがご飯を作ってくれたり、バスケットに送ってくれたり、がんばってと言ってくれたりすることだ。理由は、それが僕の力になるからだ。その頑張るという言葉を言ってもらえると、バスケットを頑張ることができるからだ。あとお母さんが作っているご飯を食べると、

力がわいてくる。いつもこういう感じで、バスケットを頑張っている。試合を頑張っている。他にも筋トレや色々教えてもらったりして、試合で頑張っている。試合に勝ったりすると、すごいほめられたりして、もっと練習したくなったりする。お父さんにも、試合で頑張るとアイスを買ってもらったり、頑張ったとか色々ほめてもらえるので、頑張っている。前の試合は接戦で、お母さんや兄と弟と父さんが見ている時逆転して、その後いっぱい点を決めた。そして、「オッシャー」と言った。そして勝った。いつも接戦の時は、後一歩というところで負けていたけれど、「オッシャー」と言った時は、すごくスッキリした。また接戦の時に勝てるように、練習をしっかりとる。

親の言葉一つひとつで、頑張れると分かった。これからは、僕も家族の心を動かせるようにしたい。